

学位論文題名

コリヤーク言語民族誌

学位論文内容の要旨

1) 本論文の観点と方法

本論文は、シベリア北東端のチュコト半島からカムチャツカ半島にかけて話されているチュクチ・カムチャツカ語族の一つ、コリヤーク語を対象とした言語民族誌の試みである。申請者は、1994年からこれまで十数年にわたりロシア連邦マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区に居住するコリヤークの言語、コリヤーク語の現地調査をおこなってきた。言語の現地調査が言語それ自体の記述を目的とするとは言うまでもないが、申請者は当該民族が暮らす現場に身を置くなかで、言語の背景にある文化にも深い関心をそそいできた。言語が急速に失われつつある今、彼らの伝統文化もまた衰退ひいては崩壊の途をたどりつつある。このような見地から、申請者の研究は「言語の文法」すなわちコリヤーク語の音韻・文法の掘り起こしとならんで、「文化の文法」すなわち民俗語彙の収集と分析を通じた民俗分類構造の解明、という二つの方向性を持ちながら、より包括的なコリヤーク語の記述をめざしてきた。

本論文は後者の観点から、コリヤークを取り巻く自然環境とこれに適応対処するための生業活動、さらには人の誕生と死をめぐる伝統的習慣のありようなどを中心に、それにかかわる民俗語彙を丹念に収集し、それらの語彙論的・形態論的・意味論的分析をおこなうことによって、ことばに刻印されたコリヤークの自然環境の範疇化、生業活動に現われた世界観から死生観までをあぶり出そうとするものである。

ここで取られた、言語と文化の連関性に関する申請者の基本的視座は以下のようなものである。すなわち、文化を環境と人間活動が相互に制限しあって織りなすネットワークと捉えるならば、そのネットワークのなかで、人はこれらの環境を固有な仕方で認識するとともに、その認識にもとづき適応対処をはかっていく。そのような適応対処の社会的コードを獲得するに際して、言語は、環境を認識し整理する、言い換えれば「範疇化」という、まさに文化形成の基盤として機能していると捉えるのである。これは言語学においては「言語人類学」、人類学においては構造主義的言語学の理論的枠組みを採用した「認識人類学」に近似した理論的立場である。

2) 本論文の内容

本論文ではコリヤークの生活全体を見渡せるような記述を目指しており、そのために、

扱う内容は多岐にわたるとともに、全体としてのボリュームをも十分に備えた民族誌となっている (xiii+379 ページ [34 字×29 行、400 字詰め原稿用紙換算約 960 枚])。そのなかで、申請者は「範疇化」というキーワードを軸に、時空間の認識、トナカイ遊牧を中心とした伝統的生業活動、衣食住の諸相から誕生と死まで、コリヤークを取り巻く環境のトータルな記述を試みている。

まず第 1 章「言語的概観」では、コリヤーク語という言語そのものの姿を概観する。系統、方言分類、言語保持状況に加え、音韻・形態・統語にかかわる主たる特徴を略述することにより、コリヤーク語の輪郭を描き出す。民俗語彙を考察の素材にする以上、言語の基本的な情報は不可欠であり、「言語学者による民族誌」としての基本的なスタンスが示される。

第 2 章「地域的概観」では、対象地域の自然環境をはじめとする概観をおこない、この地域についての基本的な理解を促す。申請者が現地調査を実施した地域の自然環境や、この地域の住民の来歴、人口や民族構成、生業活動、トナカイ遊牧移動ルートなど、本論文への導入となる基本情報が提示されている。

第 3 章から第 6 章は、コリヤークの自然環境に対する認識と適応対処のありようを民俗語彙の分析を通じて考察する、本論文の骨子にあたる部分である。まず第 3 章「時空間の範疇化」では時空間ならびに自然現象に関するコリヤーク語固有の範疇化のありようを探る。次いで第 4 章「生業活動の範疇化」では、生業活動にかかわる民俗語彙の分析を通して、厳しい自然環境への適応対処のありようが述べられる。多岐にわたる生業のうち、特にトナカイの識別名称体系、および植物利用の実態がクローズアップされる。第 5 章「衣食住の範疇化」では伝統的衣食住の観察をとおして、独自のリサイクル・システムが構築されていることが指摘される。これらの章により、自然環境に対する認識の諸相が描き出される。それは同時に、コリヤークの伝統的な日常と生活様式を如実に映し出すものである。一方、第 6 章「誕生と死の範疇化」では、人の誕生と死に対する認識と適応対処のありようが考察される。ここでは、自然的かつ生物学的営みであると同時に、ある集団のなかに産み落とされ、そこから去って行くという意味では社会的であり、また、霊魂・あの世などの観念と結びついているという意味では超自然的でもある、多面的な問題が取り上げられる。

本論文末尾には、本稿で扱われた民俗語彙のコリヤーク語索引をはじめ、言語名・民族名・地名および事項索引が付されている。また、全編にわたって、申請者自身がフィールドで撮影した写真や豊富な図表が添えられている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 津 曲 敏 郎
副 査 教 授 煎 本 孝
副 査 教 授 佐 藤 知 己

学 位 論 文 題 名

コリヤーク言語民族誌

1) 審査日程

本論文の審査は次のような日程で行われた。

平成 21 年 9 月 14 日 論文提出
平成 21 年 10 月 9 日 審査委員会発足
平成 21 年 10 月 21 日 第 1 回審査委員会：論文配布、審査日程の調整
平成 22 年 3 月 5 日 第 2 回審査委員会：口頭試問の実施
平成 22 年 3 月 5 日 第 3 回審査委員会：試問結果の検討、学位授与の判定
平成 22 年 3 月 29 日 第 4 回審査委員会：審査結果報告書（案）の作成・検討
平成 22 年 4 月 1 日 第 5 回審査委員会：審査結果報告書の確定
平成 22 年 4 月 2 日 審査結果報告書の提出
平成 22 年 4 月 9 日 研究科教授会において審査結果報告
平成 22 年 5 月 14 日 研究科教授会において学位授与承認

2) 本論文の研究成果

本論文はカムチャツカのトナカイ遊牧民コリヤークを対象とした言語民族誌の試みである。申請者は何よりも、当該民族の四季折々の生活全体が見渡せるような記述方法を探るよう努め、そのような章立てのもとに議論を展開する。記述は、時に民俗語彙を民俗分類体系として分析することに成功している場合もあれば、時に民俗語彙を用いてコリヤークの生活を描写することにとどまっている場合もある。決して一貫して一つの方法論や枠組みに立脚しえていたわけではない。むしろ、事物につけられた名称の分節のあり方を手がかりに、それぞれの文化のなかに潜んでいる秩序化・組織化の体系を探る認識人類学に通じる志向性を持ちつつも、より柔軟な記述の構えをとったといえる。なぜならば、膨大な民俗語彙の集積が、常に民俗分類の対象になりえるわけではないからである。時間表現、地形の名称、トナカイの名称など、体系全体を構成する要素が比較的限定しやすい領域があれば、逆に輪郭が限定しにくく、ゆえに体系化が困難な領域もある。体系化が可能な語

彙群だけを取り出して考察を深めていくというストイックな立場もあったであろうが、そのような方法が採られていないのは、対象がトナカイ遊牧という主生業を失い、固有の言語を失い、民族的アイデンティティを失いつつある人々だからである。

こうした点で、申請者が、学問的整合性や理論構築よりも彼らの生活全体にわたる具体的な記録を残すことを優先したのは妥当な選択であり、むしろ評価されるべき点である。アクセスのきわめて困難なフィールドで、人々の信頼を得てこれだけの一次資料を収集したこと自体、称賛と驚嘆に値する業績である。そのような事情を踏まえたうえで、本論文の成果および評価できる点は次のようにまとめられる。

- ①消滅の危機に瀕したコリヤーク語について、その民俗語彙を網羅的かつ高い精度で分析・記録した点
- ②フィールド言語学者として言語学的知見に立脚しつつ、言語と文化の境界領域を開拓した点

3) 学位授与に関する委員会の所見

審査の過程で、方法論や調査・分析の進め方などにいくつかの問題点や課題が指摘された。特に現代文化人類学の立場から見た場合、現代社会における「民族誌」の位置づけや、コミュニティと被調査者に対する研究者としての立場など、さらに考察を深めるべき課題は残されている。

しかしながら、一人の研究者による、言語を軸としたトータルな民族誌記述の試みは、当該地域以外を見渡しても、これまでに例を見ないものである。また言語学者としての視点と方法論で、「文化」の記述にこれだけ踏み込んだのも稀有な例である。民族固有の言語と文化が急速に失われつつある今、この先もこの地域でこれだけの精度の調査と記録をおこなう可能性はもはや残されていない。その意味で、申請者の独創的手法と丹念な観察眼、およびすぐれた分析・記述能力はきわめて高く評価される。

当委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに十分値する学問的価値を有するものと、全員一致して認めるに至った。